

福嶋伸洋

「近代文学の問題としての〈ハッピーエンド〉」

ブラジル・モダニズムを代表する作家マリオ・ヂ・アンドラーヂの1928年の小説『マクナイーマ』は、ブラジルのインディオに伝わるおとぎ話をモザイクのように組み合わせて作られた作品である。だが、この作品の構造をおとぎ話として分析してみようとするとき、物語（神話やおとぎ話）の時間（円環的な時間）と、近代文学（小説）の時間（線的な時間）のあいだの「断絶」があらわになってくるように思われる。

近代文学にとって、さらには、現代の多くのジャンルにとって、ハッピーエンドがますます困難なものとなってきている原因のひとつに、このような時間の断絶があったのではないか——。このような仮説のもとで、ルカーチの小説論やベンヤミンの物語論を参照し、20世紀の小説にとっての死と記憶に注目しながら、ジャンルとしての小説の時間のひな形について検討する。